平成 29 年 10 月 18 日

行　政　視　察　報　告　書

第 2 委員会　小長谷朗夫

1　視察期日　平成 29 年 10 月 10 日（火）～10 月 12 日（木）

2　視察先と目的(テーマ)

１０月１０日（火）

○　神戸市垂水区社会福祉法人みかり会：幼保連携型認定こども園、児童発達支援・放課後デイサービス心の森

＊こども園と児童発達支援施設一体型の運営並びに園での幼児の様子について

１０月１１日（水・）

○　京都市立東山泉小中一貫校

＊施設分離型小中一貫校のセカンドステージ 6 年生～9 年生（東学舎）までの学校運営、ファーストステージ（西学舎：1 年生～5 年生）の学び舎までの距離間の実際

１０月１２日（木）

○　京都府舞鶴市役所

＊地域医療の推進について（市内の関係する医療機関の協力・地域医療推進協議の実際・医療体制確保のための医師の確保対策等）

3　各視察先の考察

○みかり会：幼保連携型認定こども園、児童発達支援・放課後デイサービス心の森視察

社会福祉法人「みかり会」は、兵庫県内に高齢者介護サービス施設４か所、就労支援施設１か所、教育・保育サービス施設１０か所、子育て支援サービス施設１０か所、計２５か所の大規模な福祉施設を展開している。そのうち今回は、幼保連携型「認定こども園多夢の森」(幼老共生)、就労支援 AB 型事業所「Natural Antique Tamunomori」～森のおいしいパンやさん～、幼保連携型「認定こども園心の森」の視察を実施した。

最初に幼老共生のこども園「多夢の森」を訪問した。神戸市垂水区の高台に位置し、外壁をレンガで覆い神戸らしい洒落た造りの園舎である。中の造作についても各年齢期の部屋が従来型の直線状の配置ではなく、階を換えてクランク状に配置してあった。(これは土地の面積に限りがあり、やむを得ないことも考えられる）がこの配置が従来のこども園のイメージを大きく変えた。

また、壁、床等に重厚感があり、子どもたちは落ち着いた環境の中で、保育・教育されている。また、今回の視察目的の一つでもある幼老共生の施設でもあり、人生の入り口の世代と出口の世代が交流することができ、融合し、お互いに相乗効果が期待できる施設である。そのことは高齢者の顔がこれを証明している。

次に徒歩にて障がい者就労支援事業の一環としての施設「森のおいしいパンやさん」に向かった。数分の場所にあり、素敵な佇まいの建物で、前述の施設同様お屋敷町のパンやさんって感じのお店で、皆さん明るく元気に働いていた。みかり会ではベーカリの他にも木工クラフト、農業等就労に繋げる支援も実施している。

最後に向かった施設が「認定こども園心の森」、大きな通りに面したこれまた落ち着いた園舎で、言われなければこども園と想像できない。ここでは担当の方から、存在価値の確認、大人との接触による自己認知、受容される、文化の伝承を受けるなど、「高齢者とのふれあいが幼児にもたらす教育的意義」や人間らしさを培う共生社会の創造、障がいのない子どもの中にいるお客さまでなく、当たり前の存在としてその中にいることを願う「児童発達支援」の内容、こども園の園児との関りを通してクッキング活動や創作活動を通じて自信の獲得と能力の定着を目指す「放課後等デイサービス」の内容などのレクチャーを受けた。特に幼老共生施設については、伊豆市月ヶ瀬の複合施設ふらっとも同様で、今後はこのような複合的な施設が主流になっていく気がした。

○京都市立東山泉小中一貫校現地視察

平成２６年４月３日、４小学校と１中学校が統合され、本年で開校４年目の小中一貫校である. 年度当初の児童生徒数は小学校部４９６名、中学校部２３４名計７３０名の規模の学校である。（来年度は更に全校で２０名程度増える）

学年割は小中一貫校によく見られる４（１年～４年）・３（５年～７年）・２（８年～９年）ではなく、「すすんで学ぶ子ども　よく考える子ども　ゆめを話すことのできる子ども」を目指すファーストステージ（１年～５年４１８名）と、「自ら学び、将来を拓く力をもって　夢と目標を語ることができる子ども」の育成を目指したセカンドステージに（６年～９年３１０名）分けた。この５・４の学年割の各学び舎はファーストステージが統合された一橋小学校の跡地に新築し西学舎とし、７５０ｍ離れた月輪中学校を増築、改築しセカンドステージを東学舎とした。

さて、小中一貫校のメリットには言うまでもなく、その一つに「中１ギャップ」の解消がある。今、日本の教育は特に中１ギャップについてはあらゆる中学校において、大きな課題となってその解決に躍起になっている。このギャップは今始まった訳ではなく、その昔から実在した。しかし、子供の多様性等が理由で、数・内容に変化がみられるようになった昨今である。そこに登場したのが第３の学校と言われる義務教育学校である。この小中一貫校はその解決策として役目を果たすと言われている。東山泉小中は６年生を７・８・９年生に連結してその解決に当たっている。この実践は理にかなっている。

次にもう一つの大きなメリットと言われる９か年を通した指導体制（教科指導・生徒指導・学校行事等）が挙げられる。しかも１年生から９年生までを通した共通課題を設定しなければ一貫校にした意義がなく、東山泉小中では、１年生から９年生を通した「キャリア教育」の実践を推進している。１年生は１年なりに９年生は９年なりの指導計画に基づき一人ひとりの向上に努めている。小学校、中学校の単独校の指導は６か年、３か年の塊として押さえればいいのだが、小中一貫校は学校・行政・地域が９か年を通し

て各々の果たす役割分担で責任をもって育成、指導していくシステムになる。３者が別々ではなく、連携し合ってトリオになり子供たちを見守っていく認識は今までにはなかったはずである。学校教育だけでなく、社会教育をも包含した形でみんなが子供と関わっていくことになる。また、教師集団は一貫校に勤務することで、今までとは異なる瞬間・場面等に出会い、その指導の過程で教師ひとり一人の授業力・指導力が高まったり、延長線上ではいじめ等の減少だったり、小中一貫校にする価値は高いと考える。

最後に小中一貫校には施設一体型と分離型があるが、東山泉小中は西学舎と東学者の距離は７５０ｍで児童生徒は勿論教職員の移動がある。実際どの程度の感覚か歩いてみた。古刹泉涌寺への参道を下り（逆は上りになる）東福寺方面に歩く。半分は木立の中を歩き、残りは住宅と商店が混在している通りを歩く。職員の移動は専ら電動自転車での移動になる。（東学舎に５台、西学舎に１０台）しかし徒歩でもさほどの苦痛感はなく遠くに感じない間に新築の西学舎に着いた。（分離校は一体型とは異なる面もあるが、一貫校のよさは見劣りしないし一貫校の機能を十分発揮できる）

来年度伊豆市においても義務教育学校の土肥小中一貫校がいよいよ開校する。このことは単に小中学校のみで留まらず、併設される放課後児童クラブの運営、道を挟んだ土肥こども園、川向こうの伊豆総合土肥分校、いわゆる保・幼・小・中・高、言い換えれば０歳から１８歳までが織りなす保育・教育が展開される。この実践をしっかり評価・検討し、今後の伊豆市の中学校の在り方、また小学校の有り様に繋がっていくことに期待したい。

○京都市舞鶴市役所行政視察

直近の人口は 84,365 人世帯数 40,564 世帯、日本海に面し、しかも天然の良港をもつため戦前から日本海軍と共に発展してきた京都府北部の市である。医療環境で言い換えれば、福知山市、綾部市を入れて「中丹医療圏」を構成する。総合病院数を見ると福知山市は１病院、綾部市は１病院、舞鶴市には４病院があり、中丹医療圏の中核を成す立ち位置である。

ホテルまで公用車でのお迎えを受け、恐縮する中で市役所を訪問した。担当部の「健康・子ども部」の次長、課長、係長から説明を受けた。

まず最初に前述したように舞鶴市にはなぜ４つの総合病院があるのか？これは何回かの変遷があるものの、明治時代から日本海軍との繋がりできたこと。「舞鶴医療センター」は舞鶴鎮守府海軍病院が戦後から昭和にかけて国立舞鶴病院に変遷し、現在の舞鶴医療センターになっている。「舞鶴共済病院」は舞鶴海軍工廠職工共済病院からの変遷で、「舞鶴市民病院」は財団法人海仁会病院からの流れをくむ病院でいづれも日本海軍と深い繋がりをもって今日に至っている。４病院目の「舞鶴赤十字病院」は昭和２８年舞鶴市西地区の住民の要望により創設された病院である。

ではどうして８万５千人の人口に対して４つの総合病院が医療提供し、全国的にも大変恵まれた医療環境を形成できているのか。いくつかのハードルを越えて、または困難

を乗り越えての結果であることは間違いない。考えてみれば戦前の逓信省が各地に逓信病院を創設したり、警察関係が警察病院を設置したり附属病院をつくった時代があり、現在も脈々と受け継がれてきているのと同様、戦前の海軍省の方針で特に海軍基地がある都市には、このような医療機関を創設していった経緯がある。舞鶴市はその最たるところで現在に至っている。なお一層の公的４病院の連携による地域医療の維持のため、導き出した再編内容「選択と集中・分担と連携」「あたかも一つの総合病院」この具体目標に向かって邁進してきたことは十分評価できる。

しかし、病院経営は歴史的バックボーンだけでは生き残れない。とどのつまり最後は医師確保にぶち当たることが常である。舞鶴市では指導医（若手医師）確保対策事業補助金や地域医療確保奨学金等貸付金など工夫を凝らしている。また、京都府立医科大学の医師が、京都北部（中丹医療圏を含めて）に重点的に配属されるよう働きかけている。お抱え医科大学を持っていることは大変心強いし、私共の目から見れば、なんて羨ましいことか計り知れない。

舞鶴市は上記以外にも、中高生対象の医療に関する体験イベント、４病院がお互いに補完し合えるカルテの工夫、京丹後市を始め北丹後医療圏との広域医療圏の模索等課題は残るものの舞鶴市の実際は伊豆市では高嶺の花でとても手が届かない感じがした。

４　視察の総括

伊豆市では、修善寺東こども園建設は喫緊の課題で優先順位の高い事業である。速やかにアクションを起こしその実現に向かうべきである。こども園建設については、児童発達支援に対応できうる施設を含めて、幸いにも議員の決議として提出され一枚岩となっている。これから成すべきことは、関係担当部が全国に散在する先進的な施設等を自分の目で自分の足で十分調査・研究・検討してその方向性を決めていくことが大切であるとつくづく感じた。（全国には参考になる様々な施設がある）

次に伊豆市ではこの程、今後の中学校の在り方を検討する教育振興審議会が開催され、来年の５月ごろには答申が出される予定である。どのような案が示されるかは定かではないが、今回視察をした施設分離型の東山泉小中一貫校を改めて訪問すると、環境としては中伊豆中学校と中伊豆小学校の環境とよく似ていることが分かり選択肢の一つである確信を得た。東山泉小中の校長は開校４年目の中で、教頭として準備段階で携わり、３年間は教頭として推進に努力し、本年は自校昇任で校長になった。このことは東山泉小中の実践に大きな味方になったことだろうし力強くも感じたことと思う。

最後に舞鶴市の医療に関しては歴史の中でいくつかのハードルを越えて現在に至ったことは記述したとおりだが、その混乱期において舞鶴共済病院の院長の職にあった多々見さんが市長になり、采配を振るったことは大きい。各自治体は医療関係をまとめることができなくて頭を悩ましている時代にこれは大きい。（なんと幸せなことか）